

《論 文》

古英語の standan と
古高地ドイツ語の stān、stēn

森 基 雄

はじめに

本稿の目的は、ゲルマン語派における ‘stand’ を意味する動詞の短形と長形の成り立ちについて考察することである。短形については OHG stān、stēn を、また長形 Gmc *stand-a- については特に OE standan を取り上げて論じていくことにしたい。

1. ‘stand’ の長形と短形

ゲルマン語派には動詞 ‘go’ に長形 Gmc *gang-a- (*gung-a-) と短形 (OE gān, OS gān, OHG, OFris gān, gēn, ON gá, Crimean Go geen) があったのと同様、動詞 ‘stand’ にも長形と短形があったが、なぜか古英語とゴート語には長形 standan しか見られず、他のゲルマン語に見られるような短形は実証されない。そして ‘stand’ の長形 Gmc *stand-a- は強変化動詞 6 類に属するのに対し、その短形は現在形の場合、下記のように ‘go’ の短形のそれに等しい状況を示し、強変化動詞でも弱変化動詞でも過去現在動詞でもなく、不規則動詞として分類される。

古英語：長形 standan ~ stōd ~ stōdon ~ standen

古サクソン語：短形 stān、長形 standan ~ stōd ~ stōdun ~ standen

古高地ドイツ語: 短形 stān、stēn、長形 stantan ~ stuont (stuat) ~
stuontun (stuatun) ~ gistantan

古フリジア語: 短形 stān、長形 standa ~ stōd (stonde) ~ stōden ~
stenden

古ノルド語: 短形 (東ノルド語) stá、長形 standa ~ stóð ~ stóðu ~
staðinn

ゴート語: 長形 standan ~ stōþ ~ stōþun

さらに 'stand' と 'go' は現在形については短形はもちろん長形においても互いに類似した形態を示しており、短形は Cā-、Cē-、長形は CanC-a- という形態を構成していると言える。また長形 *stand-a- と *gang-a- はどちらも強変化動詞としては同じ 7 種類の形態構造を有しているにもかかわらず、*gang-a- は下記のようにその形態どおり 7 類として屈折するのに対し、*stand-a- は前述のように 6 類として屈折する。

古英語: gangan ~ gēong ~ gēongon ~ gangen (ただし通常の過去形は短形 gān のそれと同じ ēode、ēodon であり、7 類本来の *ge-gang- に由来する gēong、gēongon はむしろ稀)

古サクソン語: gangan ~ geng ~ gengun ~ gigangen

古高地ドイツ語: gangan ~ giang ~ giangun ~ gigangan

古フリジア語: gunga ~ geng ~ gengen ~ gangen

古ノルド語: ganga ~ gekk ~ gengu ~ genginn

ゴート語: gaggan ~ iddja (弱変化過去 gaggida もある) ~ iddjēdun
~ gaggans

まず本稿の前半では、古英語における対応形としては実証されることはないにもかかわらず、古英語でも有史以前にはまだ存続していたかも

しれない、しかも見方によっては長形 *stand-a- の形成において 'go' の短形、長形とともに欠かすことのできないものであったかもしれないその短形の成り立ちについて、短形で実証形の OHG stān, stēn をもとに考察した上で、後半では OE standan とその過去形 stōd, stōdon の成り立ちについて論じることしたい。

2. 短形の成り立ちについて

'stand' の短形については 'go' の短形の場合と同様、Jasanoff (1978: 115)、Pórhallsdóttir (1993: 35f.)、Ringe (2006: 134, 264) はゼロ階梯 IE *stH₂-je/o- に由来し、*stH₂-jo- は Gmc *staja- > *sta'a- > OHG stā- に、そして *stH₂-je- は Gmc *staji- > *sta'i- > *stai- > OHG stē- となったとしているが、Cowgill (1973: 296)、Sihler (1995: 529) はそこへさらに状態を表す接辞 IE *-eH₁- のゼロ階梯 *-H₁- が加わった IE *stH₂-H₁-je/o- に由来するとしている。Sihler はその根拠となる同族語として Osc staít (3 人称単数)、stahínt (3 人称複数)、OCS stoěti (不定詞) を挙げており、これらは語幹 *staē- (< *stH₂-eH₁-) を反映するものであり、中間段階として Osc staít は *staējeti > *staēti を、stahínt は *staējonti > *staēnti を経たものであり、Lat sedeō, OCS sěděti < *sed-eH₁- 'be sitting' に相当するとしている。ゲルマン語形がゼロ階梯の接辞 *-H₁- を有する形に由来するかどうかは定かではないが、Pórhallsdóttir はいずれにせよ Gmc *staja-, *staji- という結果となることに変わりはないとしている。

しかしこの場合まず Pórhallsdóttir の提案する *stai- > OHG stē- という音過程については疑問が生じる。すなわち強勢を有する Gmc ai は OHG ei, ē となったが、ē となったのは r, w, (Gmc h >) h の前位置であり、それ以外の環境では ei となるはずである。そしてあくまでも *staji- > *sta'i- > *stai- という音過程を容認した上でのことであるが、2

人称単数 OHG stēs が形成されるに至るまでの考えられるプロセスとして、例えば 2 人称単数の thematic な形態 *stajis が *stais となったことで、i はもはや語幹形成母音とは見なされなくなり、*stai- が語根、*-s が人称語尾、すなわち *stais は athematic な形態と見なされるようになり、しかもこうして語根と見なされるようになった *stai- と人称語尾 *-s との間には Voyles (1992) が多くの局面でしばしば提案している語中形態素境界 (word-internal morpheme boundary) が存在し、この境界の前位置では強勢を有する Gmc ai が通常の二重母音 ei ではなく ē となった結果が stēs であったと解釈することが可能ではないだろうか。そしてこの前提に立てば、さらに不定詞で (*stajan > *sta'an >) OHG stān と並ぶ stēn は、こうして生じた stē- に基づいて形成されたと解釈できるであろう。逆に表面上は *stais と同一の環境下に見える、例えば強変化動詞 1 類の OHG rīsan 'fallen, niederfallen (落下する)' の過去形で Gmc *rais (OE rās, OS rēs, Go -rais, ON reis) を反映する 1, 3 人称単数形が *rēs ではなく reis となっているのはもともと語中にそのような境界が存在しなかったからではないだろうか。

なお、直説法 2, 3 人称単数には二重母音 ei を有する形 steist, steit もあるが、この ei はもちろん Gmc ai に由来するものではなく、athematic な形態に 2, 3 人称単数としての語幹形成母音 i の二次的な付加による thematic 化に起因する stēst > *stēist > steist, *stēt > *stēit > steit という音過程の結果であったと考えられる。

古サクソン語のこの動詞の 2, 3 人称単数についても古高地ドイツ語と同様の成り立ちが考えられるのであり、2 人称単数 stēs, 3 人称単数 stēd はそれぞれ athematic となった形態 *stai- + -s, *stai- + (-p >) -d に由来するのに対し、3 人称単数のもう 1 つの形である steid は athematic な形態 stēd に 3 人称単数としての語幹形成母音 i の二次的な付加による thematic 化に起因する stēd > *stēid > steid という音過程

の結果であったと考えられる。なお、古高地ドイツ語のケースとは異なり、古サクソン語の \bar{e} は Gmc ai の通常の反映であり、前記で提案した語中形態素境界のような条件の有無とは無関係である。

これに対し、Gmc *staja-、*staji- ではなく Gmc *stæ-、*stai- を前提とした、すなわち OS、OHG、ON \bar{a} は Gmc \bar{a} に、そして OS、OHG \bar{e} は Gmc ai に対応するという大前提を貫いた主張を展開しているのが Bammesberger (1986) である (Bammesberger は IE \bar{e} のゲルマン祖語における反映を \bar{e} と表記しているが、本稿では \bar{a} と表記する)。しかしこの大原則を貫こうとすれば、OS、OHG stān、ON stá はさらに進んで IE *stē- に由来するということになってしまうが、‘stand’ は決して IE *stē- ではなく、IE *stā- < *steH₂- (Gk (Dor) histāmi) に由来する。

そこで Bammesberger (1986: 114) は自身が前提とする Gmc *stæ-、*stai- の成立過程を次のように考える。IE *stā- が Gmc *stō- となり、完了 *ste-stō- : 現在 *stō- という状況になると、同じく語根末子音のない語根構造を有する強変化動詞7類の例えば *se-zō- (< *se-sō-) : *sæ- ‘sow’ というパターンに従い、*ste-stō- : X、従って X = *stæ- が形成されたのだという。その結果として *stæ- から OS、OHG stān、ON stá が誕生したということになる。そしてもう一方の *stai- を前提とするのが OHG stēn であり、これは OHG habēn ‘have’ のような弱変化動詞3類に依拠して形成された新しい状態動詞であるという。Bammesberger (1986: 84, 87) はこの habēn を例に取って *hab-æ-je- > *hab-ai- > OHG habē- という音過程を提案しており、しかもこの音過程は *stai- にも当てはまるとしている (もちろん *-æ- は状態を表す接辞で e-階梯の IE *-eH₁- の反映であることを前提としてのことである)。すなわち完了 *ste-stō- となったことで状態という自身の意味が失われたため、現在形としては弱変化動詞3類に基づいて新しい状態動詞 *stæ-æ-je- (< *stH₂-eH₁-je-) が形成され、これがもう一方の交替形 *stai- となったのだという。

いずれにせよ、OHG stān, stēn はそれぞれ現在時制においては gān, gēn に一致した状況となっており、これは両者が互いに影響し合っていたためであり、しかも stēn は gēn とともに現在時制において弱変化動詞 3 類と融合したという見方も確かに可能かもしれない。なお、gān, gēn の成り立ちについては本稿のテーマとするところではないが、Þórhallsdóttir (1993: 35)、Müller (2007: 260f.) のように IE *ǵH₁-je/o- > Gmc *gaji-, *gaja- > *ga'i-, *ga'a- であったとする見方と、Mottausch (1997) のように IE *ǵheH₁- > Gmc *gæ-, *ǵhH₁j- > *gai- であったとする見方がある。

Bammesberger (1986: 116) は OHG gān, gēn の成り立ちについては stān, stēn についてのような詳細な分析は行なわず、stān, stēn が *stæ- : *stai- に由来するのと同様、gān, gēn は *gæ- : *gai- に由来し、両者は互いに影響し合っていたと述べるにとどまっており、*gæ- : *gai- は *stæ- : *stai- の模倣によるところが大きいととらえているに過ぎないとさえ思えるのである。

この Bammesberger の見解に反論を唱えているのが Mottausch (1998) である。まず *stā-æ-je- のように *-æ- による状態動詞化がなされたとする Bammesberger の見方に対し、Mottausch (1998:151,153) は Jasanoff、Þórhallsdóttir、Ringe、Müller が前提とする IE *stH₂-je/o- という形を支持し、この動詞の基礎となったのが状態的な意味を有する *stH₂-tos 'stehend (立っている)' (Gk statos、Skt sthita-、ON staðr) であり、この動詞の状態的な意味はすでにそこから与えられていたため、接辞 *-æ- という前提は余分なものであり、考慮する必要はないとしている。また *stā-æ-je- を前提とした場合、不定詞は *stæjan- となっていたと考えられるが、このように æ が強勢を有する第 1 音節であった場合、*stæje- が Bammesberger の仮定する *habæje- > *habai- (> OHG habē-) という音過程と同じく *stai- (> OHG stē-) となったかどうか

は疑問である。さらに Mottausch (1998: 153) は *-æ- による状態動詞であれば、ゲルマン語派では 'have' のように弱変化動詞となっていたはずであるとしている。

ただし Mottausch (1998: 156) は *stH₂-je/o- という形は認めつつも、*staja- > *sta'a-、*staji- > *sta'i- という音過程については懐疑的である。この強勢短母音と無強勢母音との間の j の消失という規則はすでに早い段階で Cowgill (1973: 296f.)、Jasanoff (1978: 115) が短形を導き出すために提案していたのであるが、これは両者が無強勢母音間の j の消失という Cowgill (1959) 自身が提案した規則をこのケースにも適用したものである。しかし Mottausch (1998: 156) は、これはあくまでも無強勢母音間の j にのみ当てはまるものであり、強勢短母音の後位置の j についてもこれが当てはまるかどうかは疑わしいとしている。Cowgill (1973: 296) は OE ēci 'eternal' を例に取り、OE ēci の前段階は Gmc *ajukijaz (Go ajukdups 'eternity') > WGmc *auki であったとして、この規則を正当化しようとしている。これに対し Mottausch (1998: 156) は、これは *auki が i-ウムラウトにより ēci となったのではなく、Brunner (1965³: 111) が述べているように、*ajuki- からは a と u の i-ウムラウトと [k] の ċ への硬口蓋化の結果である *æjici- を前段階として仮定すべきものであり、ここからさらに後続の i の前での j の消失と縮合により ēci に至ったとしている。すなわちこれはあくまでも強勢母音（しかも前母音 æ）と無強勢前母音 i との間の j の消失を示す例であって、*staja- > *sta'a- のような強勢母音 a と無強勢母音 a との間の j の消失を裏付けることにはならないのであり、無強勢の環境において当てはまるからと言って、強勢を有する環境においてもそれが当てはまるとは言えないとしている。そしてさらに *staji- > *sta'i- のような強勢母音 a と無強勢前母音 i との間の j の消失を裏付けることにもならないということになるであろう。すなわちこの Mottausch の主張は明らかに Cowgill、

Jasanoff, Þórhallsdóttir, Ringe, Müller の主張を根本から否定するものである。

Mottausch (1998: 157) はこうした立場から、このように 2、3 人称単数についても、*staji- は j ではなく i の消失により *staj- となったとしている。さらに Mottausch (157) によると、この *staj- は 'go' の短形 *gai- と似ていたために、その影響を受けやすくなった結果 *stai- が形成され、それが OHG *stē*- となり、また 'go' のもう 1 つの短形でのちに OHG *gān* となる *gæ- の影響で *stæ- が形成されたのだという。確かに古高地ドイツ語のケースのみならず、'stand' の短形が見られない古英語とゴート語以外のゲルマン語における 'go' の短形と 'stand' の短形が合致しているような状況から見て、'stand' は 'go' の影響下に入りやすかったと言えるかもしれない。

以上のことから手短かに言えることとしては、Bammesberger (1986) は 'go' の短形と 'stand' の短形については互いに影響し合っていたとはしながらも、'stand' の成立をまず第一に考え、'go' がそれに追従したかのような見方をしているのに対し、Mottausch (1998) は短形の出发点としての *gai-, *gæ- については個々の成り立ちを提案し、*stai-, *stæ- については 'go' の影響による二次的な産物であり、'stand' が 'go' に従った結果であるとしている。

3. 長形 *stand-a- の成り立ちについて

'stand' の短形に対し、長形の OE *standan* の成り立ちはいかなるものだったのであろうか。現在時制におけるこの鼻音挿入による形態のように見える Gmc *stand-a- は強変化動詞 6 類としてはユニークなものであったことは間違いないであろう。そして OE *standan* と *stōd* との関係は例えば Lat *vi-n-cō* 'defeat' と *vīc-ī* (完了形) との関係としばしば同一視される。

Seebold (1970: 461) は、*stand-a- は *stH₂- の t-拡張である *stāt- にさらに鼻音挿入が加わった結果であるとしており、ゲルマン語派以外でこれに相当するものとして Lith statýti ‘stellen (立てる、置く), errichten (建てる)’、Hitt ištand-ai- ‘zörgern, zaudern (ためらう)’ を挙げている。また Meid(1971: 57)は *stand-a-の基礎となったと考えられるものとして、t-形態で IE *stH₂- に由来する (*stH₂-tos >) Gmc *stadaz > ON staðr ‘stehend (立っている)’、そしてこれと同一形である OE stæþ, OS stað, OHG stad, Go staþs ‘Gestade, Ufer (岸、岸辺)’ や (*stH₂-tis >) Gmc *stadiz > OE stede, OS stedi, OHG stat, ON staðr, Go staþs ‘place’ を挙げている。

しかし Bammesberger (1986: 115) は *stand-a- がこうした名詞語幹から鼻音挿入によって形成されたという見方には否定的である。さらに Mottausch (1998: 147) は、もし *stand-a- がそのような成り立ちによるものであったなら、その形態構造から見て、それは強変化動詞7類と同じ構造を成している以上そこへ組み入れられ、その過去形は例えば (*gang-a- >) *ge-gang- と同じ7類型の (*stand-a- >) *ste-stand- となっていたはずであるとしている。

Bammesberger (1986: 115)、Voyles (1992: 269) は *stand-a- の起源が現在分詞にあると考える。Bammesberger は、これは語根アオリストの nt-分詞 *stH₂-ont- に由来し、本来なら Gmc *stanþ- となるはずであったが、ゲルマン語派における現在分詞の接辞はもっぱらヴェルネルの法則による *-nd- であったため、この *-nd- が導入された結果 *stand-a- となったとしている。確かにもし仮に *stanþ- という形がそのまま継承されていたならば、OE stand- ではなく (WGmc *stanþ- >) OE *stōþ- となっていたと考えられる。

Voyles は、*stand- は完全階梯 IE *stā- プラス現在分詞の接辞に由来し、*stā- は athematic な動詞であったため、現在分詞の接辞 -nd- が IE ā >

Gmc *ō* の変化に先立ち語根に直接付加されることにより **stānd-* となり、さらに *ā* が *-nd-* の前で短化され、6 類の語根母音と同一の *a* となった結果であるとしている。またこのような *-nd-* を有する不定詞が形成された原因としては、**stā-* は語根末子音を欠くという点で強変化動詞としての本来の形態素構造からは逸脱したものであったためとしている。しかし Mottausch (1998: 148) は現在分詞に由来する形態を有する強変化動詞は他に例がないとして、この見解は受け入れられないとしている。

またたとえ **stā-* のような語根末子音のない形であったとしても、のちにそれは Gmc **stō-* となり、さらに強変化動詞 7 類として、例えば OE *grōwan* ‘grow’ ~ *grēow* (< **grō-a-* ~ **gre-grō-*) と同じ型の OE **stōwan* ~ **stēow* (< **stō-a-* ~ **ste-stō-*) という形で成立していた可能性もあったのではないだろうか。すなわち強変化動詞として成り立つための条件として必ずしも *-nd-* が必要であったとは考えにくい。

また Müller (2007: 298) は、もしこのように **stand-a-* が *nt-* 接辞による分詞に由来する現在形であったのなら、前述の Mottausch (1998: 147) と同様、現在形 **stand-a-* は形態としては強変化動詞 7 類と同じであったためにそこへ組み入れられ、過去形は 7 類型の (**stand-a-* >) **ste-stand-* となっていたはずであり、6 類型の過去形 **stōþ-*/*stōd-* が成立するはずはなかったとしている。

次にその過去形 ‘stood’ を表す OE *stōd*、*stōdon* (Go *stōþ*、*stōþun*) についてであるが、Schmidt (1984: 218f.) はそれが語根アオリストの 3 人称単数 **e-stā-t* (Gk *estē*、Skt *asthāt*) に由来するとしているのに対し、Bammesberger (1986: 51f.) は次のようなやや複雑な成立過程を主張する。すなわち完了形の 2 人称単数は **ste-stā-tha* > Gmc *(*ste-*)*stōþa*、1、3 人称単数は各々 **ste-stā-a*、**ste-stā-e* だったのであり、両者はともに Gmc *(*ste-*)*stō* となったが、語根アオリストの 3 人称単数 **stā-t* が完了形として **stāt-e* へと改変された結果、新たな完了形 Gmc **stōþe* が生ま

れ、これと2人称単数の *stōpa に基づき、新しい過去語幹 *stōþ- が形成されたという。またヴェルネルの法則による -d- を有するもう1つの語幹 *stōd- はもともと後続の接辞に強勢を有していた複数形に由来するものとも考えられる一方、語根アオリストにおいてもともと強勢を有していた加音 (augment) *e- がヴェルネルの法則の時期まで保たれていたために *stōd- となった可能性もあるとしている。従ってこの場合、*stand-a- と *stōþ-/stōd- とはもともとは同根でありながらも互いに無関係に成立した形であり、前者が後者のもととなったわけでも後者が前者のもととなったわけでもなく、偶然の結果として6類と同じ母音交替 a ~ ō という母音交替に至ったということになる。

Seebold (1970: 461)、Müller (2007: 298) は t- 拡張と鼻音挿入を主張し、しかも Müller はゼロ階梯の現在時制 *stH₂-ne-t-/stH₂-n-t- が出发点であったとして、Gmc *stand-a- は後者 *stH₂-n-t- に由来する一方、過去形の出发点は完了形でアブラウトを伴う *ste-stoH₂t-/ste-stH₂t- であったとしている。そして過去形の成立過程としては、いったん単数形 *ste-stoH₂t- > *(ste-) stōt- は *stōþ-、複数形 *(ste-) stH₂t- は *stad- となったが、強変化動詞6類のパターンに従い、*stad- の a は単数形の ō に置き換えられた結果、単数形 *stōþ- ~ 複数形 *stōd- となったのち、ゴート語では *stōþ- が一般化された結果 stōþ ~ stōþun となり、西ゲルマン語では逆に *stōd- が一般化された結果 OE stōd ~ stōdon となったという解釈が可能であろう。そして鼻音 -n- を有する現在時制についても、過去時制にはそれがないということはその -n- が現在時制を形成するための接辞として挿入されたものであることを裏付けていると Müller は主張する。

Rix (2001²: 591) はもっと後期の段階での形成を仮定し、完了単数形の *(ste-) stōt-e > *stōþ- (この場合は Müller (298f.) の指摘どおり複数形に由来する *stōd- とすべきであろう) から鼻音挿入による新たな現在形 *stand-a- が形成されたとしているが、Müller (298f.) が述べている

ように、過去形に基づく新形態として形成される現在形であれば、それは鼻音挿入によるのではなく6類に依拠した **staþ-a-*、あるいは7類に依拠した **stōþ-a-* となっていたのではないだろうか（もちろん **stad-a-*、あるいは **stōd-a-* も考えられる）。すなわち6類では OE **staþan* または **stadan* ~ *stōd(on)* ~ **stæden* または **staden* (ON *staðinn*)、そして7類では OE **stōþan* または **stōdan* ~ (**stestōd-* >) **stēod(on)* ~ **stōden* となっていたであろう。

Schmidt (1984: 219ff.) は OCS *bъdъ* ‘werde sein’ (< **bhu-n-dhe/o-*) に見られるのと同じく語根 **stā-* に鼻音挿入辞 *-n-* と語根決定詞 **-dh-* が付加された **stā-n-dhe/o-* を提案しているが、Schmidt のこの見解は一般に受け入れられてはおらず、Mottausch (1998: 148) は明確にこれを却下している。

Mottausch (1998: 155-158) は出発点として現在形は **stH₂-je/o-* に由来するとした上で、現在形としてはそこからのちに生じた短形と自ら主張する1人称単数 **stajō*、2人称単数 **stajezi* (> **stajis*) を、そして過去形については前述の Schmidt (1984: 218f.) と Bammesberger (1986: 51f.) の双方の主張を認めた上で **stāþ-/stād-* (> **stōþ-/stōd-*) を推定し、**stad-* に基づく形容詞 (ON *staðr* ‘stehend’) や **staþ-*、**stad-* に基づく名詞から **stajō*、**stajezi* と並んで通俗的な第二形 **stadō*、**stadezi* が形成されたと考える。もちろんこのような第二形が実在したという証拠はないが、この第二形から鼻音を有する長形が類推的に形成されたという。そして短形の場合、**gæ-/gai-* ‘go’ の影響で **staj-* ‘stand’ から **stæ-/stai-* となったように、長形 **stand-a-* の形成も ‘go’ の影響によるものであったという。このことを Mottausch (1998: 157f.) に基づいて具体的に公式化してみると、**gæ-/gai-* : **stæ-/stai-* = **gang-a-* : X、そして X = **stand-a-* となり、鼻音挿入は **gang-a-* の影響の結果ということになる。しかし **gang-a-* に依拠するのであれば、まず **stand-a-* ではなく

*stang-a- が予想される場所であるが、そうはなっていないのは、末尾に歯音を有する過去形(*stōþ-/stōd-)の影響があったと Mottausch (1998: 157) は考える。ただし、X = *stand-a- を導き出すこの公式は 'stand' の短形の存在が実証されない古英語とゴート語に当てはまるのかという疑問が生じるかもしれない。古英語においてこの短形が実証されないことについて Mottausch (1998: 140) は、それは古英語にもかつては存在したもの、早期に放棄されたと考える。同じことはゴート語についても言えるであろう。もちろん古英語とゴート語にも 'stand' の短形が存在した時期があったということを実証例で裏付けることは不可能であるが(古英語の場合、*stǣ-/stai- に由来する OHG stān/stēn への対応形としては *stōn/stān が推定できるであろう)、既にゲルマン祖語の段階で athematic な短形が存在していたということを前提とした上での上記の公式は1つの案としては可能と言えるであろう。

4. 結語

'stand' を表す同根語どうしである古高地ドイツ語の短形と古英語の長形の成り立ちについて論じてきたが、中でも大きな問題は短形の OHG stān, stēn における母音 ā, ē の成り立ち、そして長形でアプラウトの点では強変化動詞6類に属しながらも現在時制では語根母音 a の後位置に鼻音 -n- を有し、そこへさらに -n- と同じく起源が定かとは言えない -d- が後続する *stand-a- ~ *stōd- というユニークな交替が形成されるに至ったプロセスである。

そして短形は IE *stH₂je/o- (あるいは *stH₂H₁je/o-) に由来し、のちにそれが Gmc *staji-, *staja- となり、各々が OHG stē-, stā- となったとする Jasanoff, Þórhallsdóttir, Sihler, Ringe のような見方がある一方で、Gmc *stǣ-/stai- を推定する Bammesberger, Mottausch のような見方もある。

*staja-, *staji- を大前提とするのであれば、あくまでも推定形としての *staja-, *staji- そのものの是非はもちろん、*staja- > *stā-, *staji- > *stai- という音過程についても改めて検証し、あるいは問い直すことも必要かもしれない。とりわけ問題視すべきこととしては、ゲルマン祖語において強勢を有する二重母音と無強勢母音との間に位置した j が存続している Gmc auj- > POE ēaj- > OE īej- > īj- (OE frīgea, OS frōio, Go frauja ‘lord’), Gmc aij- > POE āj- > OE æj- (OE æg, OS, OHG ei ‘egg’) などのケースとは異なり、*staja-, *staji- では j そのものが何の痕跡も残さずに非常に早期に消失するという新たな音韻法則が前提として求められることになるであろうし、またそれを音韻法則として証明することが必要であろう。

他方、Bammesberger と Mottausch はゲルマン祖語における短形としては同じく Gmc *stæ-/stai- を前提とはしているものの、その成り立ちの詳細については両者の見解は大きく異なる。また Bammesberger は短形と長形を完全に切り離して取り上げ、長形については Voyles、Bammesberger は -nd- は分詞の接辞 *-nt- に由来すると主張し、Seebold、Müller は t- 拡張と鼻音挿入に由来するとしているのに対し、短形 *stæ-/stai-, *gæ-/gai-, 長形 *gang-a-, そしてさらに長形の過去形 *stōd- の影響により、-nd- を有する長形の現在形 *stand-a- (> OE standan) が形成されたとする Mottausch の見解は注目に値するものではないだろうか。ただし長形の過去形 *stōd- における -d- の起源については現在時制と同じく Seebold、Müller は t- 拡張と見なすが、Schmidt、Bammesberger、Mottausch はアオリスト 3 人称単数や完了形 2 人称単数に起源を求めるなど、意見が分かれている。

Mottausch の見解を前提とするならば、6 類に属する長形 *stand-a- に見られる余分とも思える現在時制の接辞としての -n- の導入という見方を完全に排除することが可能となる。そして短形は長形 *stand-a- とは

同根でありながらもそれがなぜか古英語では実証されないため、それは他のゲルマン語における事項となってしまう、古英語文法では当然ながらまったくと言っていいほど取り上げられることはないのであるが、少なくともゲルマン祖語における短形の存在があったからこそ長形 *stand-a- が形成され、それが OE standan として存続するに至ったのであり、短形 (*stǣ-/stai- > POE *stōn/stān = OHG stān/stēn) は *stand-a- の形成には欠かせないものではあったもののその役目を終え、古英語期に入ると早期にそれが失われたということになる。

短形の成り立ちについての問題も含め、Mottausch の見解の詳細のすべてについての究極の是非はともかくとして、古英語形としての実証例のない短形をこのように要因の1つとしてとらえてみることもまた長形 *stand-a- の成り立ちを論じる上で1つの手段と言えるかもしれない。

[参考文献]

- Bammesberger, A. 1986. *Der Aufbau des germanischen Verbalsystems*. Heidelberg: Winter.
- Braune, W. & E. A. Ebbinghaus. 1989¹⁵. *Abriß der althochdeutschen Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Braune, W. & H. Eggers. 1987¹⁴. *Althochdeutsche Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Brunner, K. 1965³. *Altenglische Grammatik*. Tübingen: Niemeyer.
- Campbell, A. 1959. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Cowgill, W. 1959. "The inflection of the Germanic *ō*-presents." *Lg.* 36, 1-15.
- Cowgill, W. 1973. "The source of Latin *stāre*, with notes on

- comparable forms elsewhere in Indo-European.” *JIES* 1, 271-303.
- Holthausen, F. 1974³. *Altenglisches etymologisches Wörterbuch*. Heidelberg: Winter.
- Jasanoff, J. H. 1978. *Stative and middle in Indo-European*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Meid, W. 1971. *Das germanische Praeteritum*. Innsbruck: Institut für Sprachwissenschaft der Universität Innsbruck.
- Mottausch, K.-H. 1997. “Germanisch *gæ-/gai- „gehen“.” *HS* 110, 252-271.
- Mottausch, K.-H. 1998. “„Gehen“ und „stehen“ im Germanischen.” *HS* 111, 134-162.
- Müller, S. 2007. *Zum Germanischen aus laryngalthoeretischer Sicht. Mit einer Einführung in die Grundlagen der Laryngaltheorie*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Ringe, D. 2006. *From Proto-Indo-European to Proto-Germanic: a linguistic history of English. Volume 1*. Oxford: Oxford University Press.
- Rix, H. 2001². *Lexikon der indogermanischen Verben*. Wiesbaden: Reichert.
- Schmidt, G. 1984. “Got. standan, gaggan, iddja.” *Sprachwiss* 9, 211-230.
- Seebold, E. 1970. *Vergleichendes und etymologisches Wörterbuch der germanischen starken Verben*. The Hague: Mouton.
- Sihler, A. L. 1995. *New comparative grammar of Greek and Latin*. Oxford: Oxford University Press.
- Pórhallsdóttir, G. 1993. *The development of intervocalic *j in Proto-Germanic*. Ph.D.dissertation, Cornell University.
- Voyles, J. B. 1992. *Early Germanic grammar: pre-, proto-, and post-Germanic languages*. San Diego: Academic Press.

Wright, J. & E. M. Wright. 1925³. *Old English grammar*. Oxford: Oxford University Press.